

栗原淑江氏談話速記録

戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書—

小方愛可 印出也美 成瀬 萌 松田 忍

栗原淑江氏談話速記録

戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書—
小方 愛可 印出 也美 成瀬 茉 松田 忍

本速記録は、NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会（以下、継承する会）の栗原淑江氏（一九四七年）へのインタビュー調査をまとめたものである。インタビューは二〇一八年九月二〇日に東京都港区愛宕にある継承する会の資料整理室でおこなわれた。インタビュアーとなつたのは、昭和女子大学の「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書—」のメンバーである小方愛可（同大人間文化学部歴史文化学科三年）、印出也美（同一年）、成瀬萌（同一年）および松田忍（同准教授）の四名である。

本インタビューはプロジェクト活動の一環として、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の運動や被爆者調査に長年にわたって取り組んできた栗原氏から、現在に至る活動の歩みを聴取する目的でおこなわれた。

速記録の話題も、栗原氏の活動履歴に応じて、①栗原氏自身の生い立ち及び被爆者へ関心を持つに至るプロセス、②日本被団協の活動の意義および運動の思想的基盤が形成されるに至るプロセス、③被爆者の「自分史」を取り組むようになつた意図とその成果、④被爆者運動史料を保存継承する意義が中心になつていてある。

栗原氏のこれまでの活動を時期区分すると四つに分かれる（表一参照）。すなわち、①一橋大学に入学し、石田忠ゼミの社会調査実習で長崎の被爆者調査をおこなつた時期（一九六八年～一九八〇年）、②日本被団協の事務局員として運動や調査に携わった時期（一九八〇年～一九九一年）、③被爆者に「自分史」を書くよう呼びかけ、そのための交流紙『自分史つうしん ヒバクシャ』（月刊）を発行しながら活動した時期（一九九二年～一〇一三年）、④継承する会の事務局員として被爆者運動の体系的な収集に取り組んでいる時期（二〇一一年～現在）である。

被爆者たちが生きてきた軌跡や被爆体験の継承の問題を歴史として描いた研究としては、宇吹暁『ヒロシマ戦後史—被爆体験はどう受けとめられてきたか』（岩波書店、二〇一四年）や直野章子『原爆体験と戦後日本—記憶の形成と継承』（岩波書店、二〇一五年）

表1 栗原淑江氏略歴

1947年	東京都足立区に生まれる。
1954年	足立区立千寿第二小学校に入学する。
1956年	台東区立根岸小学校に転校する。
1960年	お茶の水女子大学文教育学部附属中学校に入学する。
1963年	同附属高等学校に入学する。
1966年	一橋大学社会学部に入学する。
1968年	石田忠ゼミの社会調査実習で初めて長崎訪問する。
1970年	一橋大学社会学部の助手として、1980年まで長崎の調査に継続して参加する。
1977年	NGO国際シンポジウムの被爆者生活史調査に従事する。
1980年	日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の事務局員となる。
1983－84年	被爆者要求調査に従事する。
1984年	「原爆被害者の基本要求」策定作業に従事する。
1991年	日本被団協を退職する。その後、社会保険労務士として勤務する。
1992年	被爆者に「自分史」を書くよう呼びかける。
1993年	『自分史つうしん ヒバクシャ』を創刊する。（2013年終刊）
1995年	『被爆者たちの戦後50年』（岩波書店）を刊行する。 ワークショップ「原爆被害と国家補償」を立ち上げ、事務局を担当する。 (2008年までに45回の研究会と3回のシンポジウムを開催)
2007年	「ノーモア・ヒバクシャ9条の会」が発足し、事務局に加わる。
2011年	「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の創設に関わる。
2012年	NPO法人「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」事務局（資料庫）を担当する。（現在に至る）

が近年あいついで刊行され、被爆者運動の思想的系譜を精密に検証する試みが進みつつあるように思われる。また栗原氏自身も関わっている継承する会が、被団協運動史料の組織的な収集・整理・保存活動を精力的に推し進めていることによって、被爆者運動を戦後史に位置づけていくための基礎的条件が整いつつあることも見逃せないだろう。

被爆者ではない立場で、数多くの被爆者たちと関わってきた栗原氏の歩みを聴取した本速記録が、膨大な被爆者運動史料にアプローチするための一助となれば幸いである。

栗原淑江氏談話速記録

——本日はよろしくお願ひいたします。まず、栗原さんの最近の活動について教えてください。

栗原 NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会（以下、継承する会）が二〇一一年一二月に任意団体として立ちあがり、翌年法人化されました。継承する会は、被爆者運動や原爆に関する史料をきちんと保

存して後世に残す活動をしております。その継承する会で「私は」事務局を担当しています。仕事内容としては、史料の収集・整理を含む資料庫部会の仕事と被爆者運動から学んでいくための学習会や研究会の企画をやっています。

——〔継承する会は〕二〇一二年にNPO法人化して、二〇一八年に認定NPO法人になつたんですよね。

栗原 NPO法人化したのが二〇一二年の四月、認定NPO法人という寄付した人が税制上の優遇措置が受けられる団体になつたのが今年〔二〇一八年〕です。

——日本被団協〔日本原水爆被害者団体協議会〕と継承する会はどういう関係ですか。

栗原 組織としては全く別団体です。被団協は全国の被爆者が作つた団体であり、六〇年あまり活動してきたのですが、当面の運動に一生懸命で、自分たちのやつてきたことを伝えるとか残すということはやつてこなかつた。周りはそれを心配していく、「時間的に」どんづまりになつて、継承する会を立ち上げたという形です。

栗原 最初の呼びかけ発起人は、大江健三郎さん〔作家〕とか安藤育郎さん〔放射線防護学者〕、肥田舜太郎さん〔広島で被爆、医師〕、肥田さんはこないだ史料を整理してもらいましたね。あとは広島で被爆して、いま継承する会で代表理事をしている岩佐幹三さん〔広島で被爆、法学者〕。その四人が発起人となつて、いろいろな人に協力してもらひながらここまで来ました。

広島、長崎にかかる資料だと書籍だとはたくさんあるし、資料館には保管されているわけだけれども、被爆者運動自体を伝え るセンターみたいなものはないわけね。

この会の特徴として、全国団体である日本被団協の運動、被爆地〔か否か〕にかかわらず全国で続けられてきた被爆者運動をきちんと残すという点にあるんじやないかなと思っています。そこでやつた調査とか国際活動とか、政府に向けての活動だとか、被爆者自身がやつてきた取り組みをきちんと残して、そこから学べるようにしていきたいです。

——栗原さんは、被団協の事務局員をお辞めになつたあと、「自分史つうしん」を編集なさつているじゃないですか、被団協をおやめになつたのは、運動を残す活動を被団協ができてなくて、その面を疑問に感じてお辞めになつたんですか？

栗原 別に被団協と袂をわかつたわけでもなんでもないんだけれども（一同笑）。

私はもともと大学のころから被爆者調査をやつてきていてるでしょ。個人の生活史とか精神史とかを原爆前から現在に至るまで調査をしてきたんだけども、そういう活動と被爆者運動としての活動がドッキングする必要を感じていたんですよ。

大学で研究を続けるつもりもなかつたし、運動の実践の場でそれをやりたいということで被団協のなかにいたんだけども、もちろんその中でやれない課題ではないんだけれども、さつきもいつたみた

いに被爆者運動はとにかくやることがいっぱいありすぎて、それに追われていくだけで日が経つていくというところがあつて、やつぱり運動はいろんな人が支えてやつてきてるし、これからそういう人が生まれてきたいわけで、自分なりに被爆者と関わりを持つたものとしては、何ができるのかなと考えたときに、何を始めるとかの見通しはないけれども、「辞めないとこれは始まらない」と思つて辞めてしまったんですね。それと運動のなかでは事務局員となり立場や運動を支えるという立場だったのが、辞めてからの方が個人と個人という形で被爆者とつきあえるようになつたという点はありますね。

——日本被団協の事務局員をお辞めになつたのは年表をみると、四〇歳代半ば……。

栗原 一九九一年ですから、そうですね。
——そこで仕事を辞めるというのは大きな決断だと思うのですが、その時点ですでに「自分史つうしん」をやろうと思つていたのですか？

栗原 どういう形ができるかということは決まってなかつた。なんとなくそういうことをやろうかな。一人で生きていくだけの最小限の土台をつくらないと何もできないから、仕事はしたうえで、自分のやりたいことをやりたいと思つていました。週のうち四日は働いて、あとの三日は「自分史」の取り組みにあつていました。

——日本被団協の仕事と「自分史つうしん」は別口の関心ですか。

栗原 別口とは考えていないですね。被団協のなかでも節目節目で調査をやつたり、被爆者の声を土台にして運動を再構築したりするつてことを何度もやつてきてるから、つきあつてくるなかで一人一人の被爆者の魅力が分かるんだけれども、それが何の形にもなつてないというのがあるじゃないですか、だからそれを残したいという気持ちもありましたね。それがないと結局その人たちのことはその人が亡くなれば、それでおしまいになつてしまふから。

一九七七年に三〇歳だったときには、「国際シンポジウム」「被爆問題国際シンポジウム」があつて、そのあとで現場に入りたいというのがあつて、大学を辞めて、というのがあつて、一〇年ごとに転機がきてますね。

——一橋大学で助手をなさつていたんですね。助手時代は一〇年ですか。

栗原 助手は一〇年ですね。助手のポストを使って先生たちのお手伝いをする制度が一橋大学にはあつて、私は勉強してないし、教職も持つていないし、もうちょっと残るかつてことで、結局一〇年いることになりました。

栗原 助手からアカデミックなポストにいく可能性もあつたんですか？

——いや、全然私は思つてなかつた。助手時代は好きなことをやつていました。

——今の状態としては継承する会のなかにいらつしやつて、被団協

とも一緒にやっている。

栗原　はい。

——今は基本的には史料を残す、伝えていくという活動をメインになさっているんですね。

栗原　はい、そうですね。

——私たち学生から見える栗原さんの活動は「史料を残す、伝えていく」なんですが、発信のほうはなさっていますか？

栗原　被爆者運動に学びあう学習懇談会というのを日々やっているんだけれども、今まで一〇回ぐらいやったかな。被爆者運動のなかのいろんな節目をテーマにして勉強を重ねてきましたり、それから、あと、今はデジタルアーカイブづくりに取り組んだりしています。愛宕の史料整理室で整理してもらつた史料の一部を電子化する作業をしています。

書籍とともに自費出版したような手記だとか、各都道府県の地域の被爆者団体が出版した手記集などはほとんど図書館にもないのね、それをインターネット上で読めるようにしようという作業をやっているんですけども。

東大の渡邊英徳さんのところの院生の方たちが協力してくれて、継承する会の仕事として、地図上に被爆者の証言をマッピングしていくような仕組みをつくって、ほぼ完成してきています。アーカイブ「継承する会の電子図書館」への入り口みたいな感じで一般の人々に気楽に見てもらうようなものを作りたい。それを作る作業自体

を各都道府県の被爆者の会とそれを地元で継承していこうとする人々が集まって運動化していこうという目標をもつていてるわけね、そのモデルを「二〇一八年」九月一八日に公表して、生協の人たちとかこれまで被爆者運動を支えてくれた人たちと一緒に具体化していこうとしています。「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト」という名前でやっているんですけれども。

——被爆者と原爆の資料を残すではなく、あくまでも被爆者運動を後世に残そうという目標は意識的ですか。

栗原　意識的です。ここが残さないと、運動はどこにも残せない。たとえば広島、長崎の資料館でも手記集くらいは持つているんですけども、運動の資料は持っていない。

——たとえば運動をしていない被爆者の資料は収集対象ではないから、残さないくらい意識的ですか。

栗原　いやいや、そんなことはないですよ。（一同笑）。

——提供していただいたら受けますよね（笑）。

栗原　手記集とか調査の対象になつた人たちは全部対象に含まれていますよ。

——ああ、なるほど運動の調査対象になつたという点で、全被爆者に関する情報が対象になつてていると。

栗原　そうですね。

——すみません。意地悪な質問をして（笑）。

栗原　いいえ（笑）、会員であるかないかを問わず、被爆者の書

いたもので手に入るものがあれば、送つてもらえるものがあれば、送つてもらっています。

もちろん会費を納めた人が被爆者の会の会員なんだけれども、別に会員だけが被爆者の会の活動対象ではないですからね。「相談のしおり」みたいなものは全員に送つていましたし、全被爆者を対象に運動してきていますから、それらの記録を残したいってことですね。

——あえて聞きたいのですが、被爆者運動の記録を残さねばならない理由ってなんですか。記憶遺産は遺産として残さねばならないのは分かるんですけども、つきつめるとなぜ残すのでしょうか？

栗原　運動が築き上げてきた被爆者の思想というかね、生き方というのがあると思うんですね。個々の被爆者が非常に努力してきたことが土台にあつた上で、運動つて政府に対して何かするつてだけではなくてね、広島・長崎以外に住んでいる被爆者たちも、被爆者の会ができることによつて、自分の体験を語れる場を初めて見いだしたりとかね。家族にもいえなかつたことが、同じ被爆者同士で、悩みを語り合つたりができるようになつたとが、そういう時代がずっと長くつづいていたんですね。そういうことも含めて、被爆者の会がやつてきた活動を残していく。

どこかに書いていると思うけれども、私は、原爆被害とは何なのかつてこと自体が被団協がやつた調査とか、被団協だけではなく、他のいろんな団体〔や専門家〕と一緒になつてやつてきた調査のな

かで明らかにされてきた部分というのは非常に大きいと思うんですよね。

今は核兵器は絶対悪なんていいうけれども、それがなぜなのかなっていうのはやっぱり被爆者のさまざまの証言、調査に寄せられた証言だとか、そういうものを土台にして作り上げてきた考え方であるから。本来であれば被爆国としてちゃんと原爆被害白書みたいなものをだして世界中に翻訳して普及するなんてことができていれば一番よかつたんでしようけれども、そういう動きは残念ながら日本の場合はないので、広島市、長崎市が多少頑張っているということころで。

——栗原さんが最初に長崎に調査を行つたのが一九六八年……。

栗原　一九六八年ですね。

——一九六八年といふと、日本被団協の動きをみると、「分裂の危機を乗り越えて被爆者」運動が再出発しようとしているところで、そこで調査が始まっているというのは偶然ですか。日本被団協の運動が再出発して、被爆者運動が自立した運動として立ち上がつてくることと、長崎にいたことは運動していますか。別粹ですか。

栗原　最初の発端は全然別ですね。私の先生〔一橋大学・石田忠氏〕は厚生省の昭和四〇年〔一九六五年〕の被爆者調査に関わってはじめて、この問題に取り組み始めた形ですね。この調査には、慶應大學の中鉢正美先生と東大の隅谷三喜男先生と、それに石田先生の三人がかかるんですが、やっぱり原爆といえば広島っていう感じがあつて、石田先生は長崎だけども、あとのお二人は広島を調査し

たがつたんですね。石田先生はたまたまお母様が「広島の」音戸の生まれで、広島というのもあつたから、むしろ長崎の方をやりたいというのがあって、結果的にはそれが正解だった。

——それは調査の進み方をみて長崎に「調査に」入つたのが正解だつたといふことですか？

栗原 そうですね、明らかに、長崎の被爆者は広島ほど政治的でないというか、政治に揉まれていないというか、広島はやつぱり被爆者団体が二つありましたから、同じ名前でね。分裂の余波を受けて。だから最初にどつちに「調査に」行つたかで、色分けして見られてしまふみたいな、ちょっとぎすぎさぎでしたところもあつた。

——それは広島被団協ですよね。分かれたのは何年でしたつけ。

栗原 分かれたのは一九六〇年代半ばの分裂の時期（一九六四年）ですよね。調査のときにはもう別れていました。長崎はそれに比べるとおつとりしているというか、土地柄もあつて暖かいし。だからそこから毎年「石田先生は」学生を連れて長崎に行つていきました。私もそれにくつづいて行つていましたけど。

——被団協は政治的な圧力をかけられてそうですが、継承する会のほうにはありますか。証言活動をおやめになる被爆者がいらして、その理由として「あの日」の証言はいいけれども、それ以外の政治的な発言をしないでくれといわれたという話があつたと思うのですが、そういう圧力はないですか。

栗原 繰り返す会はそういう活動（運動団体）じゃないからあまり

ないんじゃないかな。被団協の方も最近はそんなにないんじゃないかな。ただ副島まちさんの手記にもあつたけど、彼女が一円募金を呼びかけていたときに私服警官が家まで来たとか、広島の被団協で、日本被団協の代表委員もしていた伊藤サカエさんつて人がいるんだけれども、被爆者運動をしていると「アカだ、アカだ」って、核兵器に反対するだけで。戦争中の「時代を経験した」人はアカつていわれると大変なことだつたんだけれども。

——そういう風潮はいつ頃まで続いていましたか？ そういうものが薄まつてきて証言する人が増えてきたんですか？

栗原 それはどうだろう。そのつながりはわかんないな。だけど、たとえば原水爆禁止運動が分裂したことによつて、被団協はどつち系なんだみたいな形で色分けされるとかね、したがるというかね、そういうのはあつたかもしれない。

——ただ被爆者運動それ自体は全ての被爆者を対象にしてるから、肥田（舞太郎）先生がヨーロッパに行つたときの相棒は岡山で橋本龍太郎の後援会長をやつていたような人ですし、そういう意味では政治的な立場としては本当にいろいろで、自民党の議員、パッジをつけている地方議員なんて人もいたし、逆に共産党の候補になつていつも落選しちゃうなんてという人もいたし、さまざま。それで面白いのはそういう人たちでも核兵器は絶対なくさなきやいけないとか、被爆者への国家補償の制度をつくれとか、再び被爆者をつくるなどかは一緒にやつてきたというか。

——共通の意識として原爆はいけないというのがあって、それではまとまっていたということですか？

栗原 まわりからいろいろと雜音が入ってきたり、やすぶられたりってことはあつたと思うんだけれども、最後の所はやっぱり原爆のキノコ雲の下で地獄のような体験をしたというところから出発したという共通意識はすごく強くあつたわね。

——話が前に戻っちゃうんですけれども、先ほどは長崎にいつたときの話がありましたが、それより前に「栗原さんが」そもそも戦争について考えるようになつたきっかけは何ですか？

栗原 稔は昭和二年「一九四七年」生まれたから戦後すぐに生きてはいるが、まだ子どもたちの頃には、街には軍服を着た進駐軍が、有

楽町のあたりとか日比谷公園のあたりとかにいたし、私の家は足立区の方だったんで上野なんかは近いんですけど、上野には戦災孤児

当時は「浮浪兒」といつていたけど、そういう親を亡くした孤児がいたし、有楽町のガード下だったら、「パンパン」っていう、アメ

女性たちもいたし、戦争の尾ひれがいっぱい町中にあつた時代に子ども時代を送っている。本当に小さい頃のことだから、親から聞くまでそのことの意味を分かっていたわけではないけれども、私の生まれた年は憲法のできた年だから、世の中的には民主主義とか平和とかそういう価値観のなかで育つてくるわけだけれども。

私が最初に戦争嫌だなあと思ったのは、春休みとか夏休みとかに

なると必ずディズニーの映画が来たんですよ、で、映画つて最初にニュース映画があつてね、その頃は白黒なんだけれども、ニュース映画では、スエズとか朝鮮とか世界中あちこちで戦争があるから戦車がわーって走つていつて爆発して人間が飛び散るとかいう場面とかも出てくるわけ。そういうのを見ていたら、凄く怖いでしょ、なんか見てられないというのが潜在意識ではあつたと思う。

それで本当に戦争を意識するようになったのは、多分中学校にはいったのが六〇年安保の年で私はお茶大の附属「お茶の水女子大学附属中学」だったから、同じ構内に大学生たちがいて、お茶大とか、当時は教育大「東京教育大学」、今は筑波大だけれども、学生たちが毎日のよう、大学の「正門を」入ったところで集会やったりデモみたいなのをやつたりっていうそういう時代だったから、本当に子供までが「安保反対、キチ（岸信介首相）を倒せ」っていって遊んでる時代だったの（笑）。私たちも「大学生の」お兄さん、お姉さんたちが大変なことをやっているってのを知つていて。

そういうときに私の好きだった社会科の先生が、樺美智子さんが亡くなつたときに、たいへんな時代になつたつてことをとても真剣に話をしてくれて、授業の中身はおぼえてないんだけれども、そういうことだけはすごい覚えていて（笑）、なんか日本の民主主義がたいへんなことになつてゐるみたいだつていう感覚ね、そういうのはあつたのね。

で、中学校から高校時代はとにかく勉強しないで本ばかり読

んでいたから、私が好きだったのは、ロマン・ロランとか、マルタ・ン・デュ・ガールとか、ヨーロッパの第一次大戦のあとで描かれたさまざまな小説のなかには必ず戦争のことがてくる。しかもその戦場というよりも、いわゆる銃後にある人たちが戦争をあおるみたいな大騒ぎをしている訳ね、そういう動きがあるときに、それまでは平和主義者とか社会主義者とかいた人たちがどんどん戦争翼賛に変わつていつちやう、そういう風景が小説の中から読み取れて、そこがすごく怖かった。当時自分が本当にそういう時代に直面するとは思つてはいなかつたけれども、でも、もしもそういう風に世の中が変わっていったら、私なんかは弱虫だから戦争は怖いし、そういうときに本当にどうなるのかなというのはすごく不安だったしね。

どつかにそういうものがあつて、でも大学に入るときは戦争のことを探査しようと思つていたわけではなくて、教育とか社会福祉だと人間に関わるような勉強をしてみたいと思つていたんだけども、でもそういう授業はあんまりなくて（笑）、で、具体的な生の人間の問題、社会問題に関われるといつたら石田先生の社会調査ゼミとかで、あとは教育でも原典講読みたいなのが多くて、だからあまり実際の問題に関われるのつてなくて、そしてたまたま石田ゼミが被爆者問題をやつていたと。

ゼミの面接が三年生になるとあるんだけども、女子が同学年で七名しかいなかつたのだけど、どうも石田先生は女子学生を調査せ

みにいれないみたいだつていわれていて、「先生、ほんとなんですか？」つて直談判にいつたわけ（笑）、そしたら「そんなことないよ」つていわれて、面接までにこんな本を読んでおいで、つて。ちょうど被爆二〇年頃だつたからいろんな体験記がでいたんですよ、「原爆の子」とか、朝日新聞からでている『原爆体験記』とか、中国新聞社からでている本『ヒロシマの記録』三部作）だと、その足で神田の古本屋に行つて、本を買って、そして読んだら、戦後二〇年しか経つてないんだけども、私これなんにも知らないなつて。それが一つのショックだつたかな。

で、とにかく石田先生のゼミには入れてもらえたので、調査に行くことになつた。だから完全に偶然ね。だけど知れば知るほどわからないことがでてくるつていうか。最初はなんだろう、被爆者が苦しんでいるからなにか役に立つことができるのかなとか、社会福祉的観点で考えていたこともあつたけど、全然そんな問題じやなくつてもつともつと根つこの深い問題で。今戦後史を考えようと思つたら、みんながそこに一回は立ちむかわなきやいけない問題と気づいてくるような、そんな時代だつたと思います。

——子どもの頃の話がまつたが、お父さんとお母さんは何年生まれですか？

栗原 父親が大正四年（一九一五年）、母親が大正九年（一九二〇年）、で、石田先生が父親と一年違いで（大正五年（一九一六年）生まれ）。——お父さんはなにをなさつていたんですか？

栗原 父親は電通に勤めていたんですよ。

——電通！

栗原 昔でいえば、中学校をでたくらいですから、戦争中からそこにいたつていうか、当時のエリート達と違つて、下働きから入った

ようなそういうサラリーマンで。

——身近な親戚に、兵隊にとられた人はいますか？

栗原 行つた人はいます。でもその人は帰つてきていたから。だからそんなにひどい被害を受けたってのはないですね。だけど母親たちは赤羽空襲にはあつたつていつてたし、田舎に疎開して、疎開中の苦労はいろいろ聞いていましたけれども。

栗原 そうです。

——「お母様が」疎開から戻つてからお生まれになつたんですね。

栗原 そうです。

栗原 姉が昭和二〇年〔一九四五年〕生まれ、下に妹がいます。

——三人きょううだいなんですね。

栗原 そう、女ばかり。下は昭和二十四年〔一九四九年〕生まれ。

——お茶中からお茶高……。

栗原 それから一橋大学ですね。社会科が好きつてのは子どもの時からあつたみたい。小学校時代の先生は生徒に授業をやらせて、なんか算数班とか理科班とかつくつて、そこにクラス委員をやつているような人が何人かずつ貼りつけられて、生徒が授業する。するとライバルなんかがいて、絶対困らせてやろうとかいつて意地悪

な質問したりなんかして（笑）、で、私は社会科を教えていました。なにを教えていたんだろうと思うけれども。

——大学に進学したのは大学紛争で東大の入試がなかつたあたりですか？

栗原 それは私の二年あとくらいじゃないかな〔一九六九年〕。私たちのときはちょうど大学紛争の時代、私が長崎に調査に行つて帰つてきたときに、一橋が封鎖されたっていう時代です。だからほとんどの勉強してない時代。

——一橋に入つたのは紛争が盛りあがる前つて事ですね。

栗原 入つたときは明治一〇〇年、一橋つて歴史学者が結構いて、雪の日に紀元節復活反対なんとか集会とかつてのがあって、雪の日は真つ白になつて大学はこんなに綺麗なのかつていうことだけ覚えているけれども（笑）。変なことだけ覚えている（笑）。

それと学長選というのが一橋にはあつて除斥投票つていつて、候補者三人のなかで、もし学生が過半数の除斥の投票をしたらその人は候補からおろされるつていう、そういう制度があつて、私たちのときには、一回だけそれを公表しなかつた選挙があつて、それがやり直し選挙になつて、それも春休みかなんかに動員がかかつて、「みんな投票しろ」つて、出てきて投票したつてのはありましたね。

——石田ゼミもあんまりできてなかつたんですか？大学で勉強する

栗原 ゼミ自体はないわけじゃないけれども、私の一年上はすぐく

まとまっているんです。でも私の代はまさに紛争の時代そのものだったから、ゼミ自体がなかなか成り立たなかつた。なんていうか議論がオール・オア・ナッシングになつちゃうわけね。だからなかなか対話が成り立たない。卒業してもどこいったかわからない人がいっぱいいるっていうそういう世代。

——石田先生は学生からつきあげられたりはしてないんですか？

栗原 あ、徹夜団交とかはありましたよ（笑）。大学紛争で。まだ一橋の紛争は全共闘がそんなに強くなかつたからそれほどでも。中央大学とか日大とかは顔合わせるだけでボカボカに殴られるつていつて、先生たちが戦々恐々としていた時代です。東大の時計台前に私も一回行つたことがありますけれども（笑）、私の同級生なんかはヘルメット部隊でよつちゅう行つていました。

——そのあたりの話でベトナム戦争の記憶はどうですか。

栗原 ベトナム戦争はよつちゅう教室でクラス討論とかやつていました。今継承する会の事務局長をしている伊藤「和久」が私と同学年なんですよ。授業中はいないのに、クラス討論になると寮からでてきて（笑）、中庭でお昼休み集会があつたりとか、まだ私なんかは一年生、二年生だからよく分からぬ頃だけれども、でもそういうのはしょつちゅうでしたね。ペ平連の先輩たちもいたし。

——基本線としては、そこでおこなわれた議論というのはいわゆる「米帝に対する怒り」ってことですか。

栗原 ベトナム戦争については報道の限りでは分からぬじやない

ですか、アメリカとソ連の代理戦争みたいに、伝えられるというか、でもどうもそうじゃないらしいつてのが、だんだん分かつてはくるつていうかね。それにペンタゴン・ペーパーやら色々明らかになつてくることがあつたり、それから映画がつくられたり、さまざまなものを通じて、戦争には、一色で塗り固められないいろいろな側面があるつていうのを知つていく過程だつた。

被爆者の調査との関わりでいうと、被爆者の人たち、特に女性の被爆者なんかは、ベトナムの北爆で爆弾がありそそぐと、やつぱりその下にいる子ども達のことを考へてしまつという話を聞いたことがある。ふらす側じゃなくてね、自分たちが絶えずそういう側にいたわけだから。

——なるほど、「ベトナム戦争に対しても」運動としてではなく、討論つていうことですね。勉強するという冷静さがあつた。

栗原 そうですね。

——今なさつてはいる史料を残す活動についてなんですが、使命感でなさつてはいるんですか。それとも被爆者と接しているうちに、自分なりに生まれてきた間合いを解決するために、自分の関心のほうからいつてはいるのか、どちらですか。

栗原 私はあんまり使命感はもたないけれども（笑）、ずっと被爆者に関わってきた立場から何ができるのかなつてのは考えてはいたけれども。

——運動の中で一番お世話になつた方、特に深い繋がりをもつてき

たのはどういう人ですか？被団協のなかでいうと。

栗原 お世話になつたというのとは違うかも知れないけれども、一九八〇年に私が被団協に入つたときから『被団協』の新聞を編集していたのが吉田さんなの。

——吉田一人さん？

栗原 うん。吉田さんは一緒に仕事をしてきつたつていう、「[原爆被害者の]基本要求」をつくるときの中心が彼だつたし、私は資料を整理したり、今みたいにワープロなんかない時代だから、原稿を何回も書き直すのを切つたり貼つたりお手伝いをしていたつてことなんだけれども、だから議論をする時間が多かつたかなつていう気がしますね。

——だから私たちのプロジェクトが最初に栗原さんと吉田さんにインタビューをすることにしたときに、どうしてその二人なのつておっしゃつたんですか？そこは同志感があるつてことですか？

栗原 そうですね。一九八〇年代はつてことね。

その前は伊東壯さんなんかが「被団協運動の」理論的なりーダーだつたと思うんですけども、伊東さんは私たちの大学の先輩だから、早い段階から被団協の専門委員会なんかを傍聴するのを許してくれたつてところはあるんですけども。

日常的な被爆者運動つて意味で「つながりが深かつたの」は吉田さんね。あと行動のほうでは齊藤義雄さんが事務局長をしていたから、齊藤さんとのつながりはあつたかもしれないけれども。齊藤さ

んとはどこまで議論がかみあつていたかどうかはわからないところもあるんだけれども、とにかく彼が中心になつて国会の行動なんかはやつっていましたし。

あとは地方の幹部の人たちですね。むしろ日本被団協にいるときは誰かと特に「親しくする」つて風にはなかなかね。事務局員の立場では等距離に接しないと、というのがあるけれども、辞めたあととの『自分史』のほうのつながりでは、結構各地の人たちとつながれるようになつたつていうのはありますね。

——被爆者の自分史に取り組むきっかけになつたのは吉田一人さんが……

栗原 吉田さんがね、老人大学とかでね、自分史講座つてのをやつていたんですよ。私は最初は一人一人の被爆者の記録を残したといつていても、自分がいくら仕事をやめても、全国飛び回つて話を聞いていたら、せいぜい何人かしか話を聞けないから、自分で書いてもらおうという方法はないかな、とは思つていたのね。そういうときに吉田さんがそれやつてているというのを聞いて、それを見せてもらって、これはいいかもしれないと思って、とにかくやりはじめてみたところが、予想以上の反響があつて、被爆者自身からもだし、こういうことがやりたかったみたいなね、周囲の人からもこれ面白いくつて。

いろいろ相談員の会とかで被爆者の支援をしてきたような人が今まで聞いていた被爆者の証言だと、どうしても限られたものにな

るけれども、被爆以前と以後を含めた人生の歩みを聞けると、全然見方が変わつてくるというかね。だからそういう意味では、想像していだ以上の反応があつて、そこから私も教わるところがあつたりして、やつてきたんですけれども。

——【「自分史つうしん」は】何部刷つてましたか。

栗原 一番多いときで六百数十部かな。七〇〇くらいかな。

——編集するときのそこ外しちゃいけないという軸つてありましたか。書いてくださいってお願ひして、書き方みたいなのを説明して、というときの外さないポイントつてありました。あるいはもう任せちやうという感じですか。

栗原 基本的には書きたいように書いてもらつて、こちらから勝手にいじらないというか。問題を投げかけることはありますけどね。

できれば、全国あちこちだから地元で支えてくれる人がいればいいわけですね。私と通信しながら地元で支えてくれる人がいればいいんでくれて、ワープロで清書してくれるっていう関係が作れるといいなっていうのがあつたから、広島みたいにたくさん被爆者がいるところとか、愛知とかね、そういうグループができるところはそ

ういう形で進めてもらつて、最初のうちは数が少なかつたから全部一言メッセージを書いて送つていたんですけど、骨折したり腱鞘炎みたいになつたりしてそれも無理になつてきたから、それは途中から断念したんですね（笑）。

——【自分史つうしん】には続き物の記事つてあるじゃないですか。

というか、ほとんど続き物が主ですよね。あれつて最初の段階で、

何回分の記事にするとかいう話をするんですか。

栗原 私はどうからでもいいから書きやすい所から書いてつて、だから最初から順番で書く人ももちろんいるんだけれども、それつて結構力業だから。だから自分の人生のなかの一〇大ニュースじやないけれども、映画作るんだつたら、どういう一コマをいれたいってのがあるでしょ、それぞれ。そういう書きやすいところから書いてくださいって。一編はそんなに長くなくて良いから、その都度送つてくれればいいっていつていたから。だから連載で書いている人は一気に描いた人ですよね。毎月送つてくれるというようなな。

——しばらく時間が経つてから復活して書いている人もいますよね（笑）。

栗原 そうそうそう（笑）。いろいろ事情があつてね。やつていて面白いと思ったのは運動の前面に立つている人は意外に書かない。本当に今まで特にそういう役割をもつてなかつた人が書きながら変わついくっていうのが印象的だつたですね。

——吉田さんは書いていましたよね。

栗原 吉田さんは書くのね。

——藤平（典）さんも書いていますよね。

栗原 藤平さんもね。

——でもちょこつとだけ。

栗原 そんなにはないです。まあ、忙しいのもあるけれども、逆

に one of them になれないのね。多分、「なんで書かないの」「つていつも」、調査のときでも「書いて送つて」つていつても書かな

いの（笑）。地方の人たちでも書いてくる幹部の人とそうじやない

人とはつきり分かれてくるんですね。自分史だと自分をさらけださなきやいけないところがあるから、そういうのに慣れてないというか。吉田さんなんかは調査のときには必ず書いて送つてくれる。

——藤平さん「の史料」なんかを見ていてよく思うんですけど、被団協の事務局に勤めているということと、被爆者としての自分といふもの「の両方の自分」があつて、こう、「被団協の」運動方針としてまとめられていて、でも自分は自分の考えがあつていていうのがだんだん共鳴していくみたいなこともあるのかなというふうに、なんとなく想像するんですけれど、実際運動に関わっていつていろんな方針が決まっていく訳じやないです、その中で栗原さんが自身が変化していく部分つてありましたか。

栗原 変化といえば、それはもう、その中で一緒に議論しながら、学んでいくつていう感じ?だから、なんかガラッと変わるつていうよりは、「あ、本当の問題はこういうことなんだな」というところが収斂されていくつていうか、溶け込んでいるというか、自分の想いが溶け込んだものになつていく、という感覚。

例えば、すごいなと思ったのは、どつかに書いていると思うんだけど、基本懇の議論の中で、広島の有名な歴史学者の今堀誠一さんっていう方が、政府の委員会の中で意見を述べて、被爆者だけに国家補償をする理由として、原爆が落ちて平和になつたんだから、それを理由にしてね、被爆者に援護法を作ればいいじゃないかというよ

うな意見を述べたことがあるんですよ。

で、その情報が、恐らくマスコミなんかを通じて被団協に漏れてきて、どうもこういう意見が出ているみたいだと。それに対しても、「平和の礎」になつたからという理由で被爆者に援護法が作られることになると、これを認められるか「どうか」っていう議論になります。そのときに、まず、「平和の礎」っていうけども、アメリカの核の傘に覆われたような、戦後のこの、日本の「平和」は、被爆者の求めている本当の平和だとは思えない、とかね。

それから、原爆が落ちて終戦になつたていうの「[原爆終戦論]」は、事実としても違うんじゃないかと。それは吉田「一人」さんが一番こだわつて書いていますよね。この間の年表「[終戦史略年表]」なんか見るとわかると思うんだけど、とか。アメリカの歴史学者なんかも、そこはかなり研究している。そういう、事実としても、それは違うんじゃないだろうかっていう意見とか。

さらに、仮にもし百歩譲つて、それが本当にとしても、「平和の礎」になつたから被爆者に援護法を作るとか、國家補償をするとかっていう理屈をもし被爆者が認めてね、そういう援護法を作つてくれていいといつてしまつたら、戦争を終わらせるためには核兵器を使うのも有効だし、使つてもいいと、被爆者が認める事になるじやないかと。そんなことができる訳ないだろうといって、「平和の礎」論をそれはもう厳しく批判したんですよ。

で、今堀さんからは「もう被団協には協力しない」とか言われた

みたいだけど。

でも、それはすごいなと思ったのよね、そういう議論つて。やっぱり自分たちの体験と願いに即して、どういうふうにそれを理解していくかっていうのを深めていく。その時の議事録をちゃんと録つていればいいんだけど、そういうのが無いのが残念なんですが。でも、大筋としては、そういうことで、「平和の礎」論つていうのを批判していた。

で、「基本要求」を作るときには、被爆者の中には、「原爆の犠牲者たちは」「平和の礎」になつたんだっていう気持ちはものすごくあるし、なりたいんだっていう気持ちもあるわけですよね。で、そこを逆に、ここ二つの二大要求「核戦争起こすな、核兵器なくせ」「原爆被害者援護法の制定を今すぐに」が実現されたら初めて、本当の意味で「平和の礎」になることができるんだっていうふうに、自分たちの要求として、書き替えていったわけなんですね。

— そういう意味では取り入れているようなものもある訳ですね。

栗原 被爆者の気持ちとしてはね、やっぱり、本当の「平和の礎」になりたい。それはとても大事なことだからね。だけど、被爆者の求める「平和の礎」ってこういうことだよっていう。なんか、そういう議論を通じて、私もいろんなことを教えてもらったり、自分の理解が深まつてくっていう。

動の中で、一九七七年の国際シンポジウムと、「一九八〇年の」基本懇「被爆者対策基本懇」、それから「一九八四年の原爆被害者の」基本要求。これはやっぱり一つの大きな山じやないのかなと。まあ、その前に「一九七四年には」要求骨子から野党援護法案「原子爆弾被爆者等援護法案」っていうのがあるんですけどね〔表一参照〕。で、やっぱり私が運動を残したいっていうのは、そういう中で被爆者自身が作りあげてきた考え方から、というか、結論つていうよりは、作りあげる過程から、私たちが学べることはたくさんあるような気がするわけ。で、「松田」先生はこの間、「悩みながら被爆者は生きている」って「言われたけれど」、個人もそうだけど、運動自身もそうだと思うんですね。プロセスがね。その方法というかね。

なかなか難しいんだけど。それをどうやって伝えられるかっていうのが。

— 今日の午前中、ミーティングをしていたんですけど、その中でプロジェクトメンバーの一人が「このプロジェクトでは被爆者の多样性っていうことを出せるんじやないか」と「意見を出していました」。数人の被爆者プラス栗原さんを取り上げて学園祭展示にするんですけども「インタビュー後の二〇一八年一月一〇日～一月に開催された昭和女子大学秋桜祭において、プロジェクト展示「被爆者に『なる』をおこなった」、個人個人の被爆者が運動で議論したり共有したりしたことを、それぞれの人がまた持ち帰って、また

表2 日本被団協の要求に関する略年表

1957年4月	「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」(原爆医療法) 施行
1963年12月	原爆裁判（1955年4月提訴）に対する東京地裁判決 原爆投下は国際法違反。個別の損害賠償請求は棄却したが、被害者に対する国対策充実を要望
1964年	日本被団協代表理事会、約1年間機能停止
1966年10月	第23回代表理事会（神戸）において、日本被団協『原爆被害の特質と「被爆者援護法」の要求』（『つるパンフ』）発表
1968年9月	「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」施行
1971年9月	第15回定期総会「私たち原爆被害者の要求」を決議
1973年4月	日本被団協「原爆被害者援護法案のための要求骨子」発表
1974年3月	「原爆被害者援護法案のための要求骨子」の理念に立つ「原子爆弾被爆者等援護法案」を野党四党（社会党、共産党、公明党、民社党）が共同で国会提出
1980年12月	基本懇「原爆被爆者対策の基本理念及び基本的取り方について」の意見書を園田直厚生大臣に提出
1984年11月	「原爆被害者の基本要求」策定
1995年7月	「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」施行

個人で考えるみたいな……。

栗原 そうそう。

——そこですよ。

栗原 その往復運動。

——ここがすごく……。

栗原 大事なんです。

——大事だから、「プロジェクトの共同研究で」そこを描けると面白いかな。

栗原 私はよく大学時代に石田先生のゼミでは、大状況と小状況っていうんだけど、自分を取り巻く身辺のそれと、歴史の全体の大きな流れ、社会のそれとのシャトル。行ったり来たり。そのことをよく言われたのね。

社会調査なんかやるとき「も」そうだったし、自分史もまさに、個人史を歴史に重ねて書くっていう意味では。私が略年表をよく作るのも、やっぱりそういうのがあって。全部直結しているわけじゃないけど、その時代背景と、自分がその中で何をしてきたのかっていうのを、一応書いておくと、関連が見えてくるっていうものあるのでやつているんですけど。

やっぱりなんか、時代を生きるとか、人生そのものが、自分が意識しない間にわらざ、個人の歴史っていうのは社会全体のそれと深く関わっているわけだから、そこを意識して生きると、何となく流れていくのとでは、全然変わってくるじゃない？ そのこと

ころを私は被爆者の人たちから学んだし、今の人たちにもそういう生き方をね、自分なりに作つていったら、人生深まるんじやないかなって、思うところがあるのね。

——僕〔松田〕は一応研究者つてことでやつてるので、研究史をまとめることがあるんですね。そういうときに、やっぱりそれぞれの時代状況に応じて問題関心つていうのは生まれてきていて、例えば二〇歳くらい年上の研究者つていうのはその時代の状況を見て歴史を書いてるし、僕はやっぱり二〇〇〇年前後っていう時代状況から問題関心が生まれてきたつていうことを考えると、栗原さん〔として〕は今七七年、八〇年、それから基本要求つていう流れが一番……。

栗原 大きい。

——栗原さんにとって大きいこともありますし、被団協にとつても大きいつていうことだと思うんですけど、それは、世代差つてあると思います？もう一個上でやつていた人はちょっと違うことというかもなとか。

栗原 いや、でも……。

——それはやっぱり被団協の組織としてここ「一九八〇年前後」がでかいだろうということでいいですか？

栗原 被団協の人たちが何ていうかわからないんですけど……（笑）。——もちろん皆さん同じじゃないんですけど。

栗原 今からもまた大事だと思うんだけど、そこで積み重ねてきた

ものが、例えば今でいえば、核兵器禁止条約と、九条の問題とかに収斂してきてるっていう感じがするんですよ、私。

だから、全然別物じゃなくて、時代によつてちょっと様相は変わつてくるわけだけど、テーマそれ自体が変わるつていうよりはね。現れ方つていうか、具体的な焦点の結び方つていうのかしら。そういうのがちょっと変わつてくることはあるだろうけれども、大筋は……、何が根本的な問題かつていうのはそう変わつてないんじやないでしょかね。

——ちょっと思つたりするんですが、大正時代くらいに生まれて、戦争を二〇歳とか三〇歳くらいで「過ごした世代」、まあ森瀧〔市郎〕さんとかその辺の世代の人たちつて、「受忍論は悪だ」と言ひきれるのかなって……。

栗原 当たり前だつたつていう。

——そう、その辺のことなんですよね。戦後生まれだと「受忍論つて変だよね」つて……。

栗原 頭から言えますけどね。

——無邪気に言えるかもしれないけど、そこの差どうなんですか。あるんですかね。

栗原 だから、森瀧さんにしたつて、その後、戦後ね。恐らく戦争中はそうだった、それが当たり前だつたと思うけれども、戦後、彼が運動している中で、どうだろう……、受忍論……、当たり前とは言わないんじゃないかしら。

——まあ、森瀧さんはちょっと……まあ、その世代ですよね。そ

の世代の被爆者ってたくさんいると思うんですよ。

栗原いや、だからそれはね。やっぱり、受忍論一般じゃなくて、原爆被害が受忍できるかって。自分たちが体験したみたいなこれがね。やっぱり受忍できないんですよ。だから、その問題、理屈じやなくてね。やっぱり自分の問題として、こんなこと誰にももう味わつてほしくないというのがあるから、そこが私、被爆者の場合は強いような気がする。

——そうかそうか、わかりました。一般論としての受忍論でなくて、自分が受けた体験を受忍できるかどうかなんですね。

栗原 やっぱり核時代になつたときの受忍論っていうのがどんな意味を持つてくるかね。一人ひとりの人間にとつてね。

でも、一九三〇年代を生きた人たちが、今の時代がそれに似てるつてことはよく言われるでしょう？まあ、現代版の治安維持法だとかね？そういう形で言われたり、異論を排除していつたり、形は全然違つて現れているんだけど、どうなんでしょうね。戦争に向かう時代つて。それはとても怖いことだなと思うこともあるんだけど。——栗原さんご自身も、今の世の中は戦争に向かつていいいると、核兵器に対する悪いっていう認識というか、使われそうになっているつていう危機感みたいなものはやっぱりありますか？

栗原 やっぱり、何ていうのかな、そればかりの側面じゃなくて、逆の面もあるわけよね。核兵器は許せないという世論も、世界的に

見れば大きくなつてているわけでしょ？

だけどもそれ「核兵器保有」にあくまで固執するつていうか、そういう勢力も確実にいて、そこでは、すぐ核戦争が始まるというよりは、いろんな事故も含めてね、起こりかねないっていう危険性はすごくあると思うのね、今なんかね。でも、アメリカの元国防長官のペリーさんが本を出している「ウイリアム・J・ペリー著、松谷基和訳『核戦争の瀬戸際』（東京堂出版、二〇一八年）」んだけれども、やっぱり自分の経験から言つて、彼はとにかく、ビジョンを持つことが大事だと。で、いろいろ部分的な措置にしても、何に向かつてそれをやつてているのかつて、ことをわかつてやる場合と、そういうじゃない場合とでは違つてくるつて、アメリカの独立宣言の中のあれかな？人種差別だったかな、なんだつたかな、要するに、その時点ではまだ世の中としては当たり前ではなかつたけど、それを目標に掲げることでアメリカは前進してきたと。

で、それと同じようなことが核兵器の問題でもいえるといつて、だから、その意味で自分は核兵器禁止条約を評議しているという話を最近になつてしているの。アメリカの核政策をずっと担当してきた人が、キッシンジャーとか何人かの人たちがそういう投稿をずっとしているんだけど、だから、中枢にいた人たちでも、やっぱり変わつてきている。

変わらないのは日本の国会だよつて感じがする（笑）。なんか、議論すらしないっていうのは怖いのね。そこはね。

口サンゼルスの議会か何かは、核兵器禁止条約について、やつぱり批准すべきだつて決議をあげたつて。アメリカでも初めてね。で、他の国でもとにかく国会とかいろんなところで議論をするようになんとかしていこうつていつて努力しているわけだけど、日本はまだ全然ですもんね。公にはね。良い悪いはもちろんいろんな意見があるだらうけど。

何でいうのかな、一面的に悪くなっている面だけじゃなくて、逆に言えば、世界的なそれからすれば核兵器国が追い詰められてきてる面もある。北朝鮮みたいな動きも出てきてるわけだし。だから、私が被爆者運動から学んできたのは、もう一つは、やつぱり、そういう、何が今の争点になつてて、見極めるつていうか、運動はあくまで、自分たちの壁になつててるもの何なのかなつていうのを絶えず捉えながら、それに対してどういうふうに働きかけていくかつていうことを検討してて、どういふうに、その争点がどんどんどんどん、ある意味明確になり、深まつしていくつていう面もあるわけよね。

何で国家補償制度ができるのかつていうところも、最初の頃は単に予算が無いとか他の戦争被害者に波及するから、こんなことやついたら予算がパンクしちゃうだとかね、いろんなことと言つていたわけだけど。一九八〇年にあいう形で受験論が出てきて、「ああ、本当の壁はこれだつたんだ」という感じ。で、今なお、というか、今沖縄でも基地を受験させるとかね。い

ろんな場面に出でてきてるでしょ。社会保障が切り捨てられるとか、国民の生活がそれに向けて我慢させられるようになつてくとすると、ちょっと怪しいなつていうか、危ないなつて感じがする（笑）。

核兵器の被害についても、時代によつて捉え方が変わつてきてるから。最初のうちは、ケロイドとかね、急性の放射線の障害とか、そういう、明らかに目に見えるものつていうのがほとんどだつたわけだけれども、それがだんだん、医療だけの問題じやなくて、被爆者が心に抱えてきたような、様々な苦しみとか、不安だと、そういうことも被害だつていうように捉えられるようになつていくし。で、反核運動の中でも、核の冬とかね、地球環境の汚染とか、そういう面からずつと言つて、ICANも最初出てきた頃は、そういうところ、放射線障害と核の冬みたいな環境問題でパンフレットを作つていたような時代があつて。で、被団協の人たちがそれを読んで、「これだけじゃないんだよね」つていう話をしていたんですけど、今の国連での議論は、やっぱり明らかに人間被害のことろに焦点が移つてきている。それは赤十字国際委員会だとかいろんなところがそういう声を上げてきたつていう。それはやつぱり、被団協が一九七〇年代からずつとヨーロッパや各地で実相を訴えるつていうときに、あくまでもその人間被害つていうことで訴えてきたことの、一つの成果なのかなつて。それだけではないにせよね。

——次に、調査事業について聞きたいんですけど、一番成果を上げた調査つて何だつたと思います？ 一番影響力が大きかつた調査。い

ろんなことやっていますよね。で、その、なんかこう、メリハリがよくわからないんですよね。

栗原 一つでは言えないんだけれど、規模で言えば一九七七年の調査。あの国際シンポジウムの……。

——国際シンポジウムに対応する調査ですよね。

栗原 それと一九八五年の、被團協がやった原爆被害者調査。これがまあ、二大柱っていうか。で、一九七七年の方は、さつきも言いましたように、初めて原爆被害者の苦しみについてのが、世界から来た専門家たちも含めてね、議論されて。

特にその中では、あれ面白いんですけどね、一九七七年つて戦後三二年でしょう？仏教でいう三三回忌なんですよ。で、沖縄でね、いろんな証言者がその前後に出てるんです。で、特にガマの中で、逃げていた時に、赤ちゃんが泣き叫ぶからって、その口を塞いで殺してしまつたっていうお母さんの話とか、とてもそれまでには絶対出てこなかつたような、そういう証言がぼちぼち出始めた時期なので、被爆者の場合も、私も実際そういう方の話を聞いたけど、岩佐〔幹三〕さんはそうよね、岩佐さんが、お母さんが目の前で下敷きになつてるので助けられないで結局逃げなきやならなかつたとか、自分の子どもがその中で焼き殺されるのを助けられなかつたお母さんとか、そういう話がものすごくたくさん出てきたの。それまではとてもじやないけど話せなかつたようなことを、初めて調査に行つた人たちに語つてくれるっていう人があちこちで出てきて、各

地のシンポジウムの中には、そういう証言がいっぱい出てきた。

それは被爆者自身にとつても、それを語ることによって、それは自分がひどい人間だったからそうなつたんじゃない、原爆が作り出した地獄の中で、そういう状況に巻き込まれていった、それが体がやつぱり原爆のもたらした被害なんだということに気づいていく。で、しかもそういう苦しみつてある意味一生続くわけだけど、それを二度と繰り返さないという自分自身のその後の運動に立ち上がりついで、証言活動を始めたりっていう形で乗り越えていく過程つていうのが生まれてくるんだけど、聞いた人たちにとつても、さつきも言つたみたいに、被爆者は病氣で大変だとか、ケロイドとかね、そういう外的的なところで理解していくのが、こういう苦しみを一生引きずつて、心まで傷つけるんだということを知つたっていうこととか、それから、それに対して被爆者が立ち上がって、闘い続けてきたんだっていうところも含めて、被爆者っていうのが單なる被爆を受けて、みじめでね、かわいそうな被爆者っていうイメージから、そうじやなくて、それに立ち向かいながら、核兵器をなくすために生きている、生き続けている人たちなんだっていう被爆者像が世界にも知られていくっていう、そういう意味ではとても大きなインパクトがあつたんですね。それがその後の国際活動なんかのバネになつていく。

一九八五年の調査つていうのは、まさにこの基本要求で書いた

ことを、事実でもつて明らかにするつていうんで、一万三千人あまりの人たちが三〇ページくらいある問い合わせに答えて書いてくれた調査

なんですかけれども。やっぱり、原爆被害が本当に人間に受忍できるものなのかどうかとか、受忍させていいものなのかということを事実で争うつていうんで、いろいろ証言集になつたり調査報告書になつたりして出ているんですけど、被害そのものを明らかにすると

いう意味では二つの大きな調査だつたと思うし、国でもそういう調査はやれてない。

で、もう一つ私にとつてとそれから運動にとつて、小さい調査だつたけれど、とても意味があつた調査つていうのは、要求調査〔被爆者要求調査〕つていう。これは、基本権が答申を出した後で、やっぱり被団協の中ではそれをどう乗り越えていくかっていう議論がいろいろあつて、直後には各地で政府の言い分と被爆者の証言とを囁き合せるかたちで、国民法廷運動つていう模擬法廷運動が行われていくのね。

〔要求調査は〕一九八三年から一九八四年にかけてやつた。

一九八四年に発表しています。だから基本要求を作る前提になつている。で、発端はやつぱり、どういうふうにしたらそれを乗り越えていけるかなつていう議論の中です……最初は被団協新聞にこんな

ちつちやなハガキはがきのアンケートをやつたんですよ。そしたらそれにみんな結構いろいろ書いてくれて、あ、これはもしかしたらつたつていて、その中に六項目だけの、それ〔B5判〕一ペー

ジ分くらいの簡単な調査なんですけど。

——やっぱりたくさんの方の被爆者と関わりいろいろお話を伺つていく中でありますにもつらい経験とかそういうものに触れることがいろいろあると思うんですけど、聞くことがつらくなつてやめたくなつたこととかなかつたですか？

栗原 ないわけではない。大学で調査をしていた時は一年に何回も毎年のように行つていたから、やっぱりつらい話を聞くだけで自分が重くなるというか、そういうことはあつた。だけど何か自分がしてあげるんじゃなくて、むしろ自分が教わつているというか。

長い目で見れば被爆者たちも何かしてほしくて話しているわけではないのね。多分いつてみれば、これはあなたの方の問題でショットどこかで言つているのだと思うから。だから自分がそれを受け止め自分で生き方がどこまでできてるかわからぬいけどしていくことで答えていくしかないかなつていう風に、どこかで割り切つたのではないかと思います。

——先ほど石田先生のゼミで勉強したとき、「被爆者問題は」社会福祉「の問題」ではないんだと感じたのはそういうことですか？

栗原 そうですね。

——知つて何か解決策を求めるような類のものではないのだと。栗原 もちろんそれも被爆者運動の中では重要な部分として、お互いに助け合つしていくという相談事業とかはある。でも私は被爆者の

相談事業の中で面白いと思ったのは、いろいろ運動すると要求通りではなくても制度がでていく。で、その制度をできるだけたくさんの人々に活用してもらおうっていうのでそれを周知して手帳「被爆者健康手帳」を取るお手伝いもする。だけどその中で、今の制度だけではなぜ問題が解決しないのか、その制度自体の検証もしていくっていう、相談活動を通じて。だからやつぱりこう現在の法制度を活用していくことと自分たちの望むような制度を作っていくことは決して矛盾しない。そういう風に運動をしている

くというのも被爆者から教わったこと。あれかこれかでなく。——結構それって難しい。今の制度で満足してしまうという人もいるでしょ、制度を使わないことでやつてこうとかもある。

栗原 だからそれはいろいろなことをいう人は当然いますよね。今の法「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」ができた時がそういう意味では一番歓しかったと思うし、まだその問題を解決でききてないと思う。今そこを検証しようと思って、濱谷〔正晴〕さんが当時の会議の記録をもう一回掘り起こして学習会をしようとしていますけど「継承する会」「被爆者運動に学び合う学習懇談会」(二〇一八年一〇月二七日)。

——今日いろいろなお話を聞けて、いろいろなことを知ることができて本当にありがとうございます。

栗原 そうですか。いやいや。

——〔今日のお話で〕一番大きいのは継承する会が残そうとして

いる対象が運動史料だということ。その運動っていう時も、やっぱりこう色々状態変化する中で考えてきたプロセス 자체を次世代に伝え書いて、しかもそれは伝えて終わりではなくてむしろ考える材料を残す。

栗原 主体はあくまで。

——今「これから」を生きる人々というところ。そこがすごく大きいと思いました。

栗原 そうしないと本当の力にならない。

——それって継承する会のメンバーで共有でできますか？

栗原 そこはなかなか難しいです。

——結構難しいでしょう。

栗原 本当の意味で被爆者運動を知っている人はなかなかいない。残念ながらそれを言つちやうとなかなか。やつぱり今の核兵器の禁止の報道を見てもそうだけど、広島、長崎の被爆者がつてところで終わる。

——終わりますね。

栗原 もちろんみんな広島、長崎で被爆した人々なんだけど、その人たちが築き上げてきたものは、個々の人たちがやつてきたことだけでなく、一つの社会運動としてやってきたことが遺産としてとても大きい。だから、「なんで広島、長崎に資料館あるのになんで「東京にも」必要？」っていう問い合わせようと思つたら、いまのところを言わないと意味を分かつてもらえない。被爆者運動と、被爆地

だけでない全国各地でそれぞれがやつてきたつてことを。

——被団協が受忍論を取り上げるのは、運動団体としてそうなんだろうけれども、もっと重要なのは被爆者運動が粘り強く、しつこくしつこく国にアプローチしてきた結果、受忍論という考えが浮き彫りになってきたという歴史的過程が大事。

栗原 そうそう。その争点、本音が出てきたということ。

——だからその点について、あなたはどう考えますかっていう考え方を「将来に」残すのが大事。

栗原 そう、これは被爆者だけの問題ではないということ、本当はその時点でもつとね。でもその時は援護法が否定されたっていう論調が多かったかもしれないです。つい最近も広島で理事をしてくれている広島大学名誉教授の舟橋〔喜恵〕先生とメールでやり取りしていく、「基本懇答申の」直後に広島で開いた集まりも、何がこの議論の中で残つていくのかということを考えた時にはちょっと違つていたのではないかと思う、という風におっしゃついていたから。

——そこに反応しているような論調があんまり無い、『中国新聞』とかですら、ということですか？

栗原 そうですね。だから、受忍論そのものもね、基本懇の中でもともに議論されてないんです。それは、どこからかボツと出てきた、

というか、当たり前みたいに……。

〔松田〕 先生がさつき仰ついたけど、戦中派はそれが当たり前だつたじやないかつて……その、委員だった田中二郎だと、大河

内一男だとか。大河内さんは発言の中には、戦争は大変な被害を残したわけで、国民の中にはそれはやむを得ないというか、そのこと

については、もうとやかく言わないというか、一定の了解があるんだみたいな発言をしているの。それでびっくりしちゃつたんだけど。うる覚えなので今のは正確「な発言内容」じゃないんですけどね。

だから、意外にあの辺の、何だろう、基本懇の有識者と言われている人の中では受忍論っていうのは当たり前だったのかもしれない。

——そうなんですね。いや、これはインターネットから離れてしまいますけど、そこ「受忍論」を受け入れられるか、受け入れられないかつていうところが割と不明で……世の中の人が受け入れちゃつてゐるんじゃないかと考えると、被団協は実は浮いてるんじやないかと思つたりもしてしまう。厳しい話なんですが、たぶんそこは分からぬでしょ？

栗原 今それ「受忍論の受容」が、すごく蔓延してきてると思います。そんなに意識しないで、やっぱ被団協の人たちは結構早い時期から戦争した國の責任というかね、そのことを、こう、取り上げて來ているけれども、ほとんど議論にならないでしょ？それって。日本の場合はね。

——あの、ちょっと方向を変えますけど、一緒に長い時間を過ごされた吉田〔一人〕さんについて聞かせてください。

栗原 彼は、長崎の原爆って何だったのかを詳細に調べています。広島の「原爆」を認める人でも「長崎の「原爆」は不要だつた」つ

ていう人が多いでしょ？で、実際、長崎の原爆って、あの、ちょうど

御前会議が開かれているときにそういう情報は入っているんだろ
うけど、一顧だにされてない。ということで、「一体、あの原爆は、
自分が受けた原爆は何だったんだろう？」ということにをずっとこ
だわり続けてきたっていうところがあるから……。

——〔太平洋戦争〕当時の人も「あと何発も落とされるだろう」く
らいのことについてますもんね。

栗原 それで、広島は大きく扱われるかもしれないけれど、長崎は、
ちっちゃな数行の記事だけしか載らなかつたとか。だから、当時か
ら長崎はすごい、こう、なんていうかな、こう、軽視されてきたつ
ていう感じで。そのことを、彼はジャーナリストだから色々調べも
してね、あの、書いたりもしてきているから。それと、彼の書いた
ものの中では、やっぱり加害と被害の問題について書いたものは、
あれはやっぱりいろいろ教えられることが多かつたな。

——戦争における加害と被害についての論考「吉田一人「ヒロシマ・
ナガサキと日本の加害責任」（『戦争責任研究』一九、一九九八年）」つ
て、結構後年になって書いていらっしゃるじゃないですか。後年と
いうほどでもないかもしれません。あれは「吉田さんの」人生の
問い合わせといつていいんですか？

栗原 加害と被害はね、一九八〇年代くらいから被爆者が証言する
ときに加害責任について謝らないと、証言を受け入れないみたいな
ね、そういう風潮が結構「あって」広島の語り部たちにも風当た

りが……。

日本の加害責任っていうのがかなり話題になつてきいたら、被爆者
が謝ることでは本来ないけれどね、そういう、「被害よりも加害だ」
とかね、そういう風潮が強まつた時期だったんですよ。で、それに
対して、最初に議論になつたのは石田先生の『反原爆論集』（未来社、
一九八六年）を出すときに、石田先生と吉田さんの対談を載せたん
です。対談してもらって、それを載せた中でその加害と被害のこと
も議論しているんですけど。で、まとめて書いたのが、「戦争責任
研究」のね、あの論文つていうことなんだけど。

——そうか。じゃあ、あれは吉田さんの生涯の問い合わせといつ
よりも、あの時期の特有のことが割とあつてつて……。分かります。
一九八〇年代、アジアへの謝罪をきちんとしなくちゃいけないとい
うことがあつたと思いますけど、あの辺りもちょっとと……。

栗原 影響していると思います。だから、その関係をどう捉えたら
いいのかね。だって、被害者……、被爆者は圧倒的に被害者である
わけでしょ？ましてや当時、子供だった人たちなんかね。どう見
たつて加害責任を問うわけにはいかない。個人としてのそれと、国
としてやつた侵略行為とは別だから。吉田さんが議論している中で
は、「ただし、加害国の国民であった者の責任はある」と。だから
こそ今でも、国の戦争責任ということをね、ずっと被爆者運動で追
及してきているということはあるわけだから。そこら辺を單にね、「
加害か被害か」みたいな議論にしちゃつている論調が多かつたか

ら……、なんかね、そうね、それは本当に加害責任をちゃんと問うことにもならないんだよね、難しいけど。

でも、その辺の問題に、ものすごく意識的に取り組んだ人ではあるわね。吉田さんの場合ね。

——吉田さんが『被団協』の編集委員をなさっていたのは、「機関紙連合通信」に勤めながらですよね。

栗原 ええ、勤めながら、あの……で、退職の頃に、ちょっと体調を崩されたのね。でも、吉田さんは別に役員であるかないかは問わず、いろいろと新聞の編集とかには協力もしていたから。

——いや、すごいですね。一〇年間、メインの仕事もしながら『被団協』の編集をやり続けるということは……。

栗原 被団協と職場が近かつたっていうのも、歩いていくける距離だったから、それもあつたと思うけど。で、私が吉田さんと、もちろん編集もあるけれど、彼はやっぱり被爆者であると同時にジャーナリストだから、そういう目も持っているでしょ? だから、被爆体験だけだったら、ちょっと、こう、ある意味どこか壁があるかもしれないけど、話が通じやすいことはあつたかもしれない。

——やつぱり、核「問題を話す際」における被爆者と被爆者じやない人のとの差はあるでしょう?

栗原 あります。で、ましてや体験ベッタリ「(の話題)になっちゃつ

たら、「分かんないよね こんなこと話したって」っていう感じで、「はい、分かりません」って、なるじゃないですか? 分からないわ

よね、そりやね。本当のところはね。色々想像はして、近く、なんというかな、あれ「想像力」をはたらかせてくつていうことはできても。だから、まあ、そんなに簡単に分かるような体験じやないと思うんだけど。でも、やっぱりそれをちょっと突き放して見る目がある人だと、共通項がね、広がるというか、そういう面はあつたかもしだけない。議論がしやすいというかね。

——最後に、今の、若者たちに、伝えたいことつてありますか? これから展示をする予定なんですが、それを見た若い人たちに、どういうことを分かつて欲しいですか? すごいザックリしゃうんですけど(笑)。まだ展示の内容の軸が定まってない状態なんですが、とりあえず、そうですね、被爆者運動とか、そういう生き様みたいなものを若い人たちが知ることによってどういうことを感じてほしいというか……さつきも仰つてましたけど、やっぱり、向き合うことで、自分自身の生き方を見つけてほしいですか?

栗原 これから皆、社会に出て行くわけだけど、その中で、どういう風に生きるかっていうのはそれぞれに考えていることと思うけども、いろいろな課題がある中で、自分自身がどういう位置にいるのかっていうのを、絶えず、こう、見る目を持っていてほしいなと思うし、なんとなく流されるっていうのは、人生としては勿体ないというか……。

だから、なんていうのかね……。歴史のある時点を自分は生きるわけで、一生一回きりの人生だから、それをどう生きるのも、自分

が自分の人生をどう作っていくかに関わってくるわけだから。その時に被爆者たちの体験してきたことっていうのは色々な意味で参考にすることができる、宝に満ちているんじゃないかなって、私は思っている。

やっぱり、日本の戦争と戦後史を見ていく中で色々な課題があると思うけれども、とてもそれを学ぶためにも、大きな意味を持つている問題なんじゃないかなって……。

〔松田〕先生がいつかね、「被爆者たちは、原爆後にどう生きるかを自分で考え、生み出していかなきやならない立場に否応なく置かれた人たちだ」と言つたけど、まさに核時代を先取りするみたいな体験をさせられて、それをどう生きていけばいいかを試行錯誤しながら作り上げてきた人たちだから……。

——ありがとうございます。本日は長時間にわたるインタビューに応じて下さり、どうもありがとうございました。